

2023 年度春学期卒業証書・学位記授与式 告辞

下関市立大学長

韓 昌完 (ハン チャンワン)

2023 年度春学期の卒業証書・学位記授与式において、下関市立大学は 14 名の卒業生を社会に送り出します。本日は卒業生の皆さんと卒業まで励まし支えてこられたご家族の方々に、大学を代表して心からお祝い申し上げます。

社会で生きるということは、経済人になることであり、何らかの職業に就くことになります。皆さんも自分の人生を生きるために大学に通い、学びを修め、これからそれぞれの職業に就いていくでしょう。一昔前は、企業等に所属して賃金をもらうサラリーマンや飲食店や小売業、クリニックなどの自営業、家業としての農家や漁師などが主にイメージされていました。それは、ある意味で典型的な生き方が示されていた時代とも言えます。会社の先輩や上司に着いてその生き方を教えてもらったり、小さな頃から一家総出の家業として身につけたりしていました。しかし、近年はテクノロジーの発展、働き方改革やワークライフバランスの重視などを背景にして、新しい職業が生まれたり働き方が多様になったりすることで、生き方のモデルがなくなってきました。日本には、約 3 万種類の職業があると言われており、兼業や副業、趣味としての生き方も含めると、人生には無限の可能性が広がっています。

「最近の若者は～」に続く言葉で、指示待ち人間だという声をよく聞くような気がします。けれどもそれは、可能性が広がりすぎたことにより生き方のモデルや指針を見つけられず、どう生きれば良いかわからなくなっているからかもしれません。皆さん一人ひとりに「こう生きなさい」「ああ生きなさい」と答えを授けることはできませんが、どのような道を選んだとしても共通する生き方の指針はあります。

小説家の村上春樹氏は、『職業としての小説家』の中で、小説家として自分がやっていること、書いていることがいちばん正しいという考えに従って日々の生活を送っていることを語っています。彼のルールの一つは、書ける日も書けない日も、毎日原稿用紙 10 枚分だけを過不足無くルーティーンに書くこと。『海辺のカフカ』の第一稿は 1,800 枚分に及んだそうですが、半年間の 1 日 1 日の積み重ねが 1 つの長編小説になりました。また、漫画家の尾田栄一郎氏も、新人漫画家たちへのメッセージとして、漫画家という職業になったら 19 ページの漫画を毎週連載するのに、手塚賞(新人賞)は 31 ページなのだからウダウダせずにとりあえず書いて読ませなさいと発破を掛けていました。

彼らは、小説家や漫画家を職業として生きていくことに真剣に向き合い、それらの職業を日常の中に意識して組み込んでいます。分かりやすく「ページ」が基準になり、毎日の積み重ねが人生をつくっていますが、他のどのような職業にしても過ぎていく日常の重なりが 1 か月、1 年、10 年という人生をつくっていることに変わりありません。退屈な人生を生きたくないのであれば、パーツである日常を彼らのように丁寧に生きることが鍵になります。ぜひ、限られた時間の中で何か目的をもって行動したり、普段の何気ない行動もどうして今こんなことをしてるんだろうか、と考えることからはじめてみてください。目的を持って行動すれば、新しい課題という次のステップに進めます。何気ない行動にも意味を問えば、自分の未来にとって本当に大切にすべきことに気づけるでしょう。

今、世界規模で様々なことが起きており、未来に希望を持ってないと感じることもあるかもしれません。特に、自然災害や戦争による被害、核使用への緊迫感、新型コロナの変異株など暗いニュースばかりに思えます。しかし、世界的なベストセラーになった『FACTFULNESS』では、人間には問題を深刻に考える本能があるため、冷静になってデータを解釈することを呼びかけました。データを見れば世界人口のうち極度の貧困は半分に減り、1歳児の予防接種率は80%、電気が利用できる人も80%という割合で存在し、世界自体は良い方向に向かっていることは事実です。本能で生きることは瞬間的な刺激や楽しさを得られるかもしれませんが、振り回されてはいけません。日常を丁寧に生きることは、自分の人生を見据えて、今の自分の行動に意味を問うことです。そうすれば、本能でさえコントロールして冷静になることができますでしょう。

現代の働き方に関する無限の可能性は、夢があると同時に限りない選択肢を皆さんに突きつけてくるでしょう。時には悩み、迷い、不安になることもあると思います。それでも、日常を丁寧に生きることで、必ずその可能性の中から皆さんの人生の道筋が浮かんでくることを信じて、2023年度春学期の卒業証書・学位記授与式の告辞とさせていただきます。